

連載「つたえること・つたわるもの」No180
ためになる日本語——江戸・大阪・京都
《いろは歌留多》のことわざ。

出版ジャーナリスト 原山建郎

その昔（昭和50年代）、正月の三大遊びといえ、コマ回し、凧揚げ、いろはかるただった。なかでも「犬も歩けば棒にあたる」に代表される「いろはかるた（犬棒かるた）」は、大人と子どもが一緒にできる「ことば遊び」であった。小学生の私にも暗記ずみの得意札があり、目の前の絵札に勢いよく手を出さず——間違っ「お手つき」と言われたときの悔しさ、首尾よく目当ての絵札を取ったときの嬉しさ……。七五調のリズムが心地よい読み札（ことば）は覚えたものの、その「ことば（ことわざ）」の意味や由来にはあまり興味がなく、もっぱら獲得した絵札の枚数ばかりが気になったものだ。

その後、中学の国語の授業で和歌を学ぶようになってからは、これも丸暗記で『百人一首』の絵札取りに熱が入り、『いろはかるた』から遠ざかってしまった。

そしていま、小学生や中学生の孫たちと遊ぶ「かるた」は《いろは》順ではなく、その多くが物語（登場人物）を描写した《あいうえお》順の「かるた」になっている。たとえば……、

★「あ」あたまでこうげき ぐー・ちよき・ばんち！／「い」いいえがお おおきなこえで いってきます／「う」うきうきでいたずらたくらむ ばいきんまん／「え」えがおで げんきに いってきますーす

（『それいけ！あんばんまんカルタ』（サンスタ
ー文具、2023年））

★「あ」あめのぼすてい となりはだあれ／
「い」いどみずくんで おそうじだ／
「う」うとうとと おなかのうえで ひとね

むり／「え」えんのした めい（メイ）が
のぞいて さがしもの

（『となりのトトロ かるた』（スタジオジブリ
企画、エンスカイ、2012年））

実は、今回のコラムを書くために、松戸市と市川市の図書館から借りてきた『ことわざで遊ぶ いろはかるた』（時田昌瑞著、世界文化社、2007年）、『江戸のころ・上方の智慧』（藤本義一・杉浦日向子著、小学館、1998年）『今昔いろはカルタ——世渡りの知恵、ことわざ』（鈴木棠三著、錦正社、1973年）を、何日かかけて読み込むうちに、「いろはかるた」は江戸時代中期に始まった《ことわざ》の遊びであったこと、大別すると「江戸いろは」「上方（大坂）いろは」「上方（京）いろは」の三種類の「いろはかるた」があること、そして「いろは歌」は江戸時代の手習い（当時は変体仮名）手本として、一般庶民の識字率（読み書き能力）を高める役割を果たしたこと、などがよくわかった。

この「いろはかるた」読み札リストは、『新釈いろはかるた』（滑川道夫著、ぎょうせい、1983年）を参考に、原山が作成したものである。★「江戸／上方（大坂）／上方（京都）」の順にまとめてある。

★「い」犬も歩けば棒にあたる／一を聞いて十を知る／一寸先は闇 ★「ろ」論より証拠／六十の三つ子／論語読みの論語知らず ★「は」花より団子／花より団子／針の穴から天井をのぞく ★「に」憎まれっ子世にはばかる／憎まれっ子神直し／二階から目薬 ★「ほ」骨折り損のくたびれ儲け／惚れたが因果／仏の顔も三度 ★「へ」尻をひって尻つぼめ／下手（へた）の長談義／下手の長談義 ★「と」年寄りの冷や水／遠い一家より近い隣／豆腐に銚（か

すがい) ★「ち」ちり(塵)も積もれば山となる/地獄(ぢごく)の沙汰も金次第/地獄の沙汰も金次第 ★「り」律儀者の子沢山/綸言(りんげん:天子のことば)汗の如し/綸言汗の如し ★「ぬ」盗人(ぬすびと)の昼寝/盗人の昼寝/糠(ぬか)に釘 ★「る」瑠璃(るり:青色の宝玉)も玻璃(はり:水晶)も照らせば光る/類をもって集まる/類をもって集まる ★「を」老(お)いては子に従ふ/鬼(おに)の女房に鬼神(きしん)/鬼(おに)も十八「わ」われ(割れ)鍋にとじ蓋/笑ふ門には福来たる/笑ふ門には福来たる ★「か」かたい(「かたい」の変化形※ハンセン病患者)のかさ(瘡:※皮膚病患者)怨み(※「うらやみ」の意)/かげ(陰)裏の豆もはじけ時/かへる(蛙)のつらに水 ★「よ」よし(葦)のずい(髓)から天井のぞく/よこ(横)槌で庭を掃く/夜目遠目傘のうち「た」旅は道づれ世は情け/大食(だいじき)上戸の餅食い/立て板に水 ★「れ」れう(良)菓は口に苦し/連木(れんぎ)で腹を切る/連木(※すりこぎ)で腹を切る ★「そ」惣領(※惣領息子)の甚六(じんろく:お人好し、ぼんやり)/袖振り合うも他生の縁/袖振り合うも他生の縁 ★「つ」月夜に釜を抜く/爪に火を点(とも)す/月夜に釜を抜く ★「ね」念には念を入れ/寝耳に水/猫に小判 ★「な」泣きっ面に蜂/習わぬ経は読めぬ/濟(な)す時の閻魔顔 ★「ら」楽あれば苦あり/楽して楽知らず/来年のことを言へば鬼が笑う ★「む」無理が通れば道理引っこむ/無芸大食/むま(馬)の耳に風 ★「う」嘘から出たまこと/牛を馬にする/氏(うち)より育ち ★「ぬ」芋(いも)の煮えたもご存知ない/炒(い)り豆に花が咲く/鯛の頭(かしら)も信心から ★「の」のど元すぎれば熱さ忘るる/野良の節句働き/鑿(のみ)といはば槌(つち) ★「お」鬼(おに)に金棒/陰陽師(おんみゃうじ)身の上

知らず/負(お)うた子に教えられ浅瀬を渡る ★「く」臭いものに蓋/臭いものに蠅がたかる/果報(くわほう)は寝て待て ★「や」安物買ひの銭失ひ/闇に鉄砲/闇夜に鉄砲 ★「ま」負けるは勝ち/待てば甘露(かんろ)の日よりあり/蒔かぬ種は生えぬ ★「け」芸は身を助ける/下戸の建てた蔵はない/下駄と焼味噌 ★「ふ」文(ふみ)はやりたし書く手は持たぬ/武士は食わねど高楊枝/武士は食わねど高楊枝 ★「こ」子は三界の首っ枷(かせ)/志は松の葉/これに懲りよ道斎坊(どうさいぼう) ★「え」得手(えて)に帆をあげる/閻魔の色事/縁の下の力持ち ★「て」亭主の好きな赤烏帽子/天道人を殺さず/寺から里へ ★「あ」頭かくして尻かくさず/阿呆につける菓はない/足元から鳥が立つ ★「さ」三べん廻って煙草にせう/さわらぬ神に祟(たた)りなし/竿の先に鈴・猿も木から落ちる ★「き」聞いて極楽見て地獄/義理とふんどしかかぬばならぬ/鬼神に横道なし・義理とふんどしかかぬばならぬ ★「ゆ」油断大敵/油断大敵/幽霊の浜風 ★「め」目の上の瘤(こぶ)/目の上の瘤/盲の垣のぞき ★「み」身から出た錆(さび)/身うちが古み・蓑売り(蓑打ち)が古蓑(み)/身は身で通る裸ん坊 ★「し」知らぬが仏/尻食(しりくら)へ観音/吝(しは)ん坊の柿の種 ★「ゑ」縁(えん)は異なるもの味なもの/縁の下の力持ち/縁と月日・縁の下の舞 ★「ひ」貧乏暇なし/貧相の重ね食い/瓢箪(ひょうたん)から駒 ★「も」門前の小僧習わぬ経を読む/桃栗三年柿八年/餅屋は餅屋 ★「せ」背に腹はかえられぬ/背戸(せど)の馬(むま)も相口(あひくち:互いに気が合うこと)/聖(せい)は道によりて賢し ★「す」粹(すい)は身を食う/墨に染まれば黒くなる/雀百まで踊り忘れず ★「京」京の夢大坂の夢/(※「京」の項なし)/京に田舎あり

ここで少し気になったのが、「を、ゐ、ゑ」に合わない仮名遣い、「ひ、れ」と異なる漢字の音である。この疑問について、『今昔いろはカルタ』の著者、鈴木棠三さんが、次のように説明している。

▲「を」鬼も十八（京カルタ）／老いては子に従へ（江戸カルタ）

▲「ゐ」鯛の頭も信心から（京カルタ）／芋の煮えたもご存知ない（江戸カルタ）

▲「ゑ」縁の下の舞（京カルタ）／縁は異なるもの味なもの（江戸カルタ）

がある。これは歴史的仮名遣では、オニ、オイテハ、イモ、エンが正しいのだが、京カルタも江戸カルタも歩調をそろえて、ヲ、キ、エの札にしているのである。これを正しい仮名遣に直すとなると、新たにキ・エ・ヲの札を考えなければならぬということになり、昔カルタの復原という趣旨にそわなくなる。

また、漢字の音についても、

●「ひ」瓢箪から駒が出る（京カルタ）

●「り」良薬は口に苦し（江戸カルタ）

の一枚は誤りである。瓢箪はヘウタンが正しいのにヒの札になって居り、良薬はリヤウヤクなのにレの札に入れてあるからである。つまり、江戸カルタも京カルタも、ワ行のキ・エ・ヲと、漢字の音とで同じような誤りを仲よく同数だけ犯しているのである。しかし、これらを訂正すると、改正いろはカルタになってしまうので、手を付けるわけに行かない。

（『今昔いろはカルタ——世渡りの知恵、ことわざ』「3 いろはカルタあらまし」2～3 ページ）

ところで、「いろはかるた」は、「いろは譬え（※ことわざ）かるた」のことで、まず「上方かるた」が江戸時代中期（1704～89年）に上

方（大坂、京都）で生まれ、その後、江戸固有の「江戸いろは」になったといわれている。同じ「いろはかるた」でも、上方と江戸では読み札の「ことわざ」が少し異なっている。

大阪生まれの直木賞作家・藤本義一さん、東京生まれの江戸風俗研究家・杉浦日向子さんが、共著書『江戸のこころ・上方の智恵』の中で、江戸と上方それぞれの「いろはかるた」について書いている。

☆「を」江戸いろは 【老いては子に従ふ】 年をとってからは、何事も子に任せ、それに従ったほうがよい。／地方から単身で出稼ぎに来る人の集中した江戸では、農村部と異なり独居老人に比率が高かった。家族もなく、隣近所に支えられて暮っていた。ふだんは非力な老人でございと、若いものにおんぶにだっこ。若いものにしても、国元に残してきた親へのうしろめたさも手伝って、自発的に孝行の真似ごとをした。おかずをわけたり古着を都合したり、世話を焼くうちポックリ逝って、土間の塩壺に小銭がざっくり溜まってたなんてのもザラにあった話だ。伊達に年をとったわけじゃない。老いては子（若年）に従うとみせて、上手にコキ使うが良い。「老い先短い」は武器になるセリフだ。「あんたらまだ先が長いから、この後いくらでもチャンスはあるだろうけど、老い先短い身だから」と。いつでも真っ先にうまいところをゴッソリもっていけば良い。

【日向子】

☆「を」上方いろは 【鬼も十八】 【「鬼も十八番茶も出花」の略。】 鬼でも年ごろになれば少しは美しく見え、番茶でもいれたばかりは香りがある。器量が悪くても、年ごろになれば少しは娘らしい魅力が出てくるということ。／十八歳という年齢は、井原西鶴の『好色五人女』にも描かれた八百屋お七の年

齡からではないかと推定される。(中略)江戸時代も現代も男女ともに人生の曲がり角に立つようだ。稀代の辻斬り魔の白井権八も寛文十二年(一六七二)に同僚の鳥取藩士を殺害し、十八歳の時に江戸に狂奔し、遊女小紫と知り合い、金欲しさに辻斬りをつづけて自首して刑死されたのが二十五歳であり、権八の後を追って小紫が自害したのが十八歳という。八百屋お七といひ権八・小紫といひ歌舞伎(※『八百屋お七歌祭文』、『鈴ヶ森』)で華やかに蘇った十八歳が諺に植え付けられたのだろう。

【義一】

(『江戸のころ・上方の智恵』52～55ページ)

また、「いろはうた」は「い」から始まり「す」で終わるが、「いろはかるた」には最後に「京」がついている。そのわけは、江戸時代に流行った「道中双六(東海道五十三次の絵を順次渦巻き形に描いた絵双六)」が、「江戸」を振り出しに進み「京」で上がりとするからという説もあるように、「京の夢 大坂の夢」(江戸かるた)と「京に田舎あり」(上方かるた)を比べてみると、それぞれ気風の違いがよくわかる。

☆「京」江戸いろは【京の夢 大坂の夢】夢の話をする前に唱える言葉。夢の中では、時間・空間をこえてさまざまなことが実現されるので、こういう。／京、大坂、江戸で三都という。京は千年の王城の地、雅(みやび)の都。大坂は商人の栄える街、商(あきない)の都。江戸は全国から諸侯の集まる街、武の都。これをもって、三役揃い踏みとなる。(中略)上方(※京、大坂)から江戸へはいるものを「下(くだ)りもの」と呼んで珍重し、固定ブランド化された。衣食住から文化まで、ひたすら上方のものをおしいただき、コピーしつづけた。江戸

の庶民にとって、下りものはなんでもありがたかった。下りもの以外の、地ものや下ってこないような粗悪品を「下らぬもの」といい、つまらない、価値がない、取るに足りない、「くだらない」とさげすんだ。

【日向子】

☆「京」上方いろは【京に田舎あり】にぎやかな都にも、意外に田舎めいて開けていないところがあるものだ。／京に田舎ありの絵札には必ず大原女(おはらめ)の姿が描かれている。

かるたが生まれた頃、京は日本で最も華やかな町であった。その町に、なんと薪などを頭にした大原女が歩いているという感嘆がこの諺になったのだろう。観光都市の京に田舎が存在しているアンバランスをいったと思われる。これは江戸カルタの「京の夢大阪の夢」を粉砕する迫力をもっている。

が、この言葉につづけて「田舎に京あり」と通常口にするところを見れば、**住めば都**の元祖かもしれない。何処の土地にも都市ふうの場所もあれば郊外の雰囲気をもっている場所があり、それが一体化して風土を醸し出しているのである。

パリに田舎あり、ニューヨークに田舎あり、東京に田舎あり、なのだ。

【義一】

(『江戸のころ・上方の智恵』196～198ページ)

なるほど、「いろはかるた」は、江戸時代に生まれた〈ことば遊び〉、「日本文化の玉手箱」である。